

日本科学哲学会 第44回大会ワークショップ
記憶とは何か：記憶概念の再検討

オーガナイザー・提題者：河野 哲也（立教大学）

提題者：森 直久（札幌学院大学）

提題者：中澤 栄輔（東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」特任研究員）

趣 旨： 記憶は、プラトン以来の哲学の伝統的なテーマのひとつであるが、近代以後においては、スピリチュアリズムとプラグマティズムにおける習慣論、分析哲学における記憶と人格の同一性の議論、現象学における時間意識などの文脈で論じられてきた。しかし、実証科学の成果と照らし合わせながら、記憶の本質やステイタスについて哲学的に論じることは、ベルクソン以降、あまり盛んではなくなった。（イアン・ハッキングの記憶論はすぐれた例外である。）

だが他方、現代の心の科学における記憶論は混迷を極めている。心理学における記憶の種類は、その分類の根拠が明らかにされないままにだらしなく増え続け、実験条件に対応した「記憶」が実体視されて、脳への局在化が求められている。記憶は心理学においてさまざまなメタファー（痕跡、倉庫、文書、物語、傷など）によって理解されてきたが、これらのメタファーの有効性も問われている。本ワークショップでは、現代の心の科学における記憶概念に批判的に対峙しながら、記憶とはそもそも何であるか、根本から問い直す作業を開始したい。

「心理学における記憶と人格の概念」 河野 哲也

記憶の概念は、時間がもたらす変化に人間がどのように抗っていくかという問題と密接に関わる概念である。本発表では、何かを保持・持続させようとする人間的な努力の中で、心理学が研究対象としての記憶をどのように絞り込み、どのようにその実験方法を確立してきたかを歴史的に概括し、そこに見られる心理学の「欲望」を明らかにしていきたい。とくに注目したいテーマは、記憶の個人主義化と人格の統一性との関係性（とくに、リボーにおける「人格の解体」、ジェームズにおける「夢中遊行」や「多重人格」、ジャネのヒステリー研究にみられる記憶と人格の関係）、そして、記憶と真理との関係性である。それらの検討を通して、記憶の心理学がただの純粹認識としてではなく、社会的実践の一部として機能してきたことを、理論心理学の立場から示すことにする。

「記憶における因果性と記憶痕跡」 中澤 栄輔

記憶とは何か。心的イメージの想起が記憶に本質的であるとする記憶の表象的理解が記憶の哲学における標準であり、それは記憶の因果説にサポートされている。記憶の因果説によると、ある心的表象が記憶表象だといえるのは、その表象が過去の表象と因果的連鎖をもつ場合である。では、その「因果的連鎖」とは具体的に何か。一般的な回答は、「記憶における因果説は、過去の心的表象と現在の想起とを結びつける因果的プロ

セスを担う記憶痕跡を要請する」というものだ。「記憶とは何か」という問いは、記憶痕跡の探求として、脳神経科学により経験的に明らかにされるべき問いとなる。記憶痕跡探求の脳神経科学の実際はどうか。(1) 歴史的に、過去の内的な認知状態はひとまとまりのニューロンによって個別的に担われている、という考えかたがあった。しかしこうした記憶痕跡が発見される見込みは薄い。(2) 脳において新たな長期増強が形成されたとき、その長期増強が形成されたシナプスこそが記憶痕跡である、と考えることもできる。脳神経科学の実際に適合するのはこちらである。脳神経科学の実際に適合した記憶痕跡概念を行動的理解と名づける。記憶は行動の変化として機能的に捉えることが脳神経科学の観点から自然と導かれるからだ。記憶とは何か、表象的理解から行動的理解へとベースを移したとき、記憶の哲学の問題は次のステージに移行する。わたしたちは実際になにか記憶をイメージすることができる。さて、この心的イメージを意識的に想起することはどういうことなのか、そして、それにはどういった意味があるのか、そして、心的イメージの現象的性質をどう説明するか。こうした問いにたいしてはすぐさま回答を出すことはできないし、問題は記憶の哲学固有の領域に留まるものではない。ただ、こう問うことで記憶の哲学の根本問題を心の哲学の文脈に位置づけ、そのリソースを活用することができるようになる。

「体験者の持続と生態学的想起論」 森 直久

記憶を貯蔵された痕跡とみなす見解は、素朴、アカデミック両心理学に広く行き渡っている。この見解の論理的不合理を指摘し、記憶を「現在における想起」とみなす発想は、ヴィトゲンシュタインの影響を受けた分析哲学者や、社会構成主義の立場をとる心理学者によって強調されている。最近の心理学は、この二つの見解の間を振動しているように見える。前者に与すれば先の論理的不都合を抱え込み、後者に与すれば過去の実在の否定という、我々の素朴感覚に抵触する。これが振動の理由である。

我々は裁判における供述(自白、目撃証言)の信用性評価を行なうなかで、真の体験と作話は、語られた内容ではなく、語りの形式によって判別可能であることを発見した。語りが作話でなく体験の想起である場合、語りの文体、語り手のパースペクティブ、適切な媒体使用からの逸脱といった、想起者の身体的挙動に特有の傾向が現れるのである。この現象は、ある特定の環境と接触した体験者の身体(「過去の私・身体・自己」)が、今ここの想起の場に至るまで持続している(「現在の私・身体・自己」でもある)ことを示す。ここから我々は、体験を貯蔵された記憶痕跡によってではなく、「体験者の持続」という概念によって担保する道を得た。

「体験者の持続」を組み込んだ想起理論が、James Gibson の生態学的知覚論を敷衍することで構築されようとしている。「ある環境に接触した私」(過去の私)は「すでに接触していない私」(現在の私)へと変化しているが、なおも同一の「私」である。入れ子になった二重の「私」(変化した私としていない私)を、環境に発見することが想起である。Gibson によれば、環境と自己は相補的である。すなわち、自己を特定する情報は環境に発見することができる。ならば想起とは、知覚がそうであるように(しかし知覚とは異なるモードの)、環境探査の一種であることになる。